

平安時代古記録の複合動詞 ―後項動詞の補助動詞化に着目して―
柳原恵津子

本発表では、峰岸明や発表者による、平安古記録には古記録特有の複合動詞が多く見られるという指摘を足がかりとして、平安期の主要な古記録で使用された複合動詞を、主に後項動詞の複合動詞化という観点から概観したものである。本発表で明らかにするのは、以下の三点である。

1. 古記録、中古和文双方で複合動詞後項として多く現れる動詞の多くが、中古和文では補助動詞的な用法を持つが、同時代の古記録では本動詞に添った用法のみが認められる。例外として、院政期の『殿暦』、鎌倉期の『民経記』に「～置」の補助動詞的用法と解釈できる例が、和化の度合いの強い文体で書かれた『御堂関白記』に、「～行（ゆく）」の補助動詞的用法と本動詞用法との境界にあると思われる例が見受けられる。
2. 古記録では複合動詞の後項動詞として用いられるが、中古和文では頻出しない動詞（「一参」「一着（著）」「一送」「一行（おこなふ）」「一定、」など）を後項要素とする複合動詞群に、峰岸明が指摘した古記録特有の複合動詞が見受けられる。これらの語彙は、「語彙的複合動詞」のうちの「主題関係複合動詞」に相当すると考えられる。補助動詞化の進んだ後項要素をとる「アスペクト複合動詞」が主流であった和文とは異なる造語の仕組みで、古記録特有の複合動詞は作られていたと考えられる。
3. 古記録では複合動詞後項として用いられず、中古和文に頻出する動詞群の中には、「一はつ（果）」「一わたる（渡）」など、現代語では特定の複合動詞に痕跡として残るのみの動詞が多くみられる。古記録で本動詞として広く複合動詞の造語力を持たなかったことと、後世造語力を失っていくこととの間の関係の有無が検討されるべきだろう。